

ひとひらの雪

(上)

渡辺淳一



渡辺淳一

ひとひらの雪

文藝春秋

ひとひらの雪(上)

著者 渡辺淳一

定価 九八〇円

昭和五十八年二月二十五日 第一刷
昭和五十八年七月十五日 第十三刷

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

102 東京都千代田区紀尾井町三の二三

電話 〇三(265)二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 大口製本

万一落丁乱丁の場合にお取替えいたします

目
次

秋 思	青 芒	若 竹	余 花	春 愁	双 葉	日 永	佗 助
290	227	173	143	104	69	29	5

ひとひらの雪
上

A D 装画・原万千子
D 坂田政則

佗助

5 佗助

明方、朝地震^{あさない}があった。電話があったのは、そのしばらくあとだった。

初め、ベルは遠く眠りのなかからきこえ、次第に意識のなかに入ってきた。醒めやらぬ頭のま
ま、伊織はベッドから腕を伸ばして受話器をとった。

「お目ざめですか」声は柔らかだが、少しくぐもっていた。

「七時ですよ」

その言葉で、伊織の脳裏に高村霞の爽やかな顔が甦ってきた。

「まだ、お休みでしたか」

「いや、ありがとう」

昨夜、別れるとき、伊織は七時に起こしてくれるように頼んだ。枕元のナイト・テーブルの時
計は、正確に七時を指している。

「雪が降ったのですよ」

伊織は上体をのばしてカーテンを開けてみた。十二階のマンションから見える街は薄く雪化粧
をし、すぐ下に駐車したままになっている車の屋根にも雪が積っていた。

「そちらは、やんできますか」

「ほとんど……」

ひとひらずつ、なお残りの雪が朝の光りのなかで落ちているが、これ以上降り続ける力はなさそうである。

「こちらはまだ降っています。やはり田舎なのですね」

霞の住んでいる辻堂は茅ヶ崎の一つ手前で、東京よりは暖かいはずである。

「今朝、地震もあったのです。お気付きになりましたか」

「知らなかった。何時ころですか」

「五時半ころです。さほど強くはありませんでしたが、でも大分長いあいだ電気の笠が揺れていました」

「そのころから、起きていたのですか」

「ええ……」

伊織は昨夜、このベッドでうずくまっていた霞のことを思い出した。着物のうえからは痩せてみえたが、腕のなかで息を潜めた牀には豊かな温もりがあった。

「じゃあ、それからずっと……」

「眠ってしまったのは、起こすことができません」

電話の先で、霞が小さく笑ったようである。

「お仕事はできそうですか」

「大丈夫です。お陰で助かりました」

今日、伊織は昼までに、原稿を書いて渡すことになっていた。霞にモーニング・コールを頼ん

だのは、そのための早起きであった。

「外の空気を吸われたら、きっと目が覚めますよ」

「コーヒーでも、飲んでみます」

「それでは……」

電話を切りかけた霞に、伊織はいいかけてやめた。昨夜のことを話すには、雪の朝は明るく、眩しすぎた。

受話器をおくと、伊織は再びベッドにもぐった。せっかく、モーニング・コールで起こしてもらったのだから、そろそろ仕事をはじめなければならぬ。

正直いって、七時というのは少し余裕をもった時間である。昼迄に渡すといっても十枚の原稿である。せいぜい三時間もあればできそうである。

もっとも起きてすぐ書き出せるというわけでもない。伊織は朝に弱いだけに、頭が順調に働きますまでに時間がかかる。コーヒーを飲み、新聞を読む時間も必要である。しかしそれにしても、七時は少し早すぎたかもしれない。八時でも間に合うはずだが、伊織は、朝の早い時間に霞の電話をもらいたかった。

「明日の朝、起こしてもらえないだろうか」

昨夜、伊織は霞に頼みながら、その表情を見ていた。

夫がいる家庭から、はたして朝早く電話をよこせるだろうか。伊織の依頼のなかには、軽い嫉妬と、相手の困惑する顔を見たいという少し意地悪な気持もあった。

だが、霞は、一瞬考えるように首を傾けただけで、すぐうなずいた。

「何時が、よろしいでしょうか」

「七時に……」

顔を見たが、動じた気配はなかった。

伊織は霞の生活についてはほとんど知らない。せいぜい、夫が鎌倉と銀座に店をもつ美術商で、女の子が一人いるといった程度のことである。こちらからきかないかぎり、霞は自分から家庭のことを話さないし、伊織も無理にききだそうとは思わない。別居しているとはいえ、伊織にも妻子がいる以上、相手を問い詰めるほどの権利はない。

家庭のことを探りだせば、お互いに傷をさらけ出すだけである。伊織も霞も、そのあたりのことはわきまえている。余程のことがないかぎり、相手の領域に踏みこむことはない。

だがときに、かすかな妬心が芽生えることもある。

昨夜の霞はかぎりなく優しく豊饒であった。燃えたあとも伊織は離しがたかった。しかし、九時を過ぎると、霞は腕のなかからそろそろ顔をもたげ、起き上った。そして一時間後には、きたときと変らぬ生真面目な顔で鏡に向かい、着付けを終えた。

「明日、七時に……」

伊織はそれを軽い罰のつもりで、霞にいい渡した。

霞からの電話で、伊織の頭は完全に眠りから醒めたようである。そのままガウンを着て戸口へ行き、新聞を取ってリビング・ルームへ戻る。二LDKのマンションで、入口から続く十五畳ほどの部屋をリビング・ルームにつかい、あと寝室と書斎と全部で三部屋だが、二十五坪あり、一人で住むには充分の広さである。

リビング・ルームは南向きで、ベランダのカーテンは半ば開かれたまま、レースのカーテンの

あいだから、朝の陽が洩れている。まだ昇ったばかりで陽あしは長く、それが途切れる位置にソファがある。それと向かい合った椅子とのあいだにガラスのテーブルがあり、その上の細長い花瓶に佗助が一輪投げこまれている。

昨日、霞が持ってきて、活けていたのである。

「出がけに、庭に咲いていて美しかったものですから……」霞は持ってきた理由をそういった。

佗助は椿に似ているが椿ではない。白い一輪の花を咲かせるが、開ききらず釣鐘型のままとどまる。その控えめな風情が古来から茶人に好まれたらしく、多く茶室のにじり口か、寺社の庭などにひっそりと咲く。

霞はなに気なく家から持ってきたと告げたが、伊織は白い花から、佗助のある庭を想像した。

茂みの手前に蹲踞があり、奥に灯籠が見える。その陰にでも咲いていたのか、それとも竹林から洩れてくる陽ざしの先に、静まりかえっていたのか。いずれにしても、佗助が咲く庭なら、静かな趣きのある庭に違いない。そこに夫と暮している霞に、伊織は軽い妬みを覚えた。

「なぜ、佗助というか、ご存じですか」

「佗助という人が、中国から持ち帰ったとか」

「それも、ご主人からきかれた……」といいかけて、伊織は口を噤んだ。

そこまでいって、妬む心があらわになる。

白い佗助に、妬心はそぐわない。

霞は小枝を手に持ち、もってきた鋏で葉を落した。椿と同様、佗助も、いかに葉を落すかに心を配る。はたから見ていると、無残と思うほど葉をけずっていく。

「あなたに似ている」

「なんでしょう」

「いや……」

曖昧な返事のまま、伊織は夕暮れのなかで活けている霞のうえに佗助を重ねていた。

無造作に投げこまれたように見えて、よく見ると、佗助は朝の光りのなかで、すっきりと立っている。一本の枝も、一枚の葉も、これ以外に動かしようがない。ぎりぎりのところで、緊張した空間をつくり出している。

花を見ながら、伊織は、昨夜、霞が花鉢をおいていったことを思い出した。あれは本当であったのか、夢のような気がして、飾り棚の抽斗ひきだしをあけると、たしかに鉢をおさめた箱がある。

花鉢をおいていったことは、また花を持って訪れてくるということか。そのときは素直にそう思いながら、いまは鉢だけ、ぼつりと残されたような頼りなさがある。

伊織のなかで、昨夜のことが、まだ現実のこととなって甦よみがえってこない。すべてが夢を見ているような、半信半疑なところがある。その茫漠とした目覚めのなかで、伊織は小さくつぶやく。

「ヤクザか……」

昨夜、床へ誘うとき、霞は小さな声で「ヤクザにしないで下さい」といった。

あれはどういう意味だったのか……

たしなみのいい人妻が、夫以外の男に肌を許すことは、ヤクザなことだという意味なのか、それとも、求めようとする伊織をヤクザだという意味なのか。

だが言葉とは別に、霞の躰は逆らいながら優しくなっていた。

伊織はソファに背を凭たよせ、目を閉じた。

すると自然に、昨夜の乱れた霞の姿が甦ってくる。白くやわらかな牀であった。そのまま回想のなかに身をまかせて目を開けると、目の前の佐助がかすかに揺れている。

どうしたのか、改めて目をこらすと、かすかに軋む音がして部屋全体が揺れているようである。「地震か……」

今朝、軽い地震があったと霞は教えてくれた。その余波が、いままた訪れたのだろうか。ベランダを見ると、レースのカーテンの裾もゆっくりと揺れている。

伊織は吸いかけた煙草を灰皿に戻し、もう一度、佐助を見た。朝の光りのなかで、一枝の先の花もかすかに揺れている。伊織はそこに、横を向いた霞の細い首と顔を見ている。

このまま、揺れて崩れるならそれでもいい。そう思ったとき、朝地震は気怠い朝の空気のかで静まった。

地震がおさまったところで、伊織はコーヒーを飲むためキッチンに立った。

四十半ばになって、一人の生活はなにかと不便である。お茶一杯飲むのから、電話の取り次ぎ、衣服の整理まで、すべて自分でやらなければならない。もつとも部屋の掃除だけは、一日おきに午後から家政婦がきてやってくれる。簡単な炊事や洗濯くらいなら、頼めばやってくれるが、伊織は洗濯ものはほとんどクリーニング屋に出し、食事は大半が外食である。幸いマンションは青山で、まわりにレストランや料理店が多く、出前もすぐ届けてくれる。多少、お金はかさむが、それで一応不自由はしない。

だが現実の生活には、それ以外にこまごまとした繁雑さがくわわってくる。セーターや靴下をどこにしまったか忘れてしまう。煙草の買いだめが切れたり、至急、銀行からお金をおろしてこなければならぬときもある。さらに来客のとき、一人では、自分でコーヒーや紅茶を淹れなけ

ればならないこともある。原稿を書いていた、調べものをしてるとき、そんな相手にわずらわされるのは気が重い。

「お家にお帰りになったら……」

昨日、コーヒーを飲みながら霞がいったが、多少、手間がかかって、一人でいたい。いまの伊織はいくばくかの便利さより、自由のほうを選びたい。

それは、家を出たときからの信条である。それにいま、家を出ているから、霞にも逢えたともいえる。

伊織はキッチンのガスをつけ、薬缶の湯を沸かした。キッチンにはオーブンとともに、三つのガス台があり、一人ではもったいない広さである。ときどき、そのガス台のまわりに埃がたまったり、湯こぼれの斑点が残っていることがあるが、今朝のガス台のまわりはすべすべと輝いている。流しのステンレスも、水道栓のまわりも洗い清められ、飲み終ったカップを入れてあったボウルも、片隅に伏せられている。

左手の洗いの籠のなかにはナプキンが敷かれその上に、洗われたグラスが伏せられ、その上にもう一枚、ナプキンが重ねられている。家政婦のお座なりの掃除とは違って、きっかりと整頓されている。

流しを片付けていく、それだけの行為のなかにも霞の几帳面な性格が滲んでいる。

コーヒーを飲み、ひと通り新聞に目を通すと八時だった。そろそろ人々が動きはじめたらしく窓の下から車の行き交う音がする。だが表の通りから少し入っているせいもあって、音はさほど気にならない。

伊織はカップに残ったコーヒーを飲み干し、さらに一本煙草を喫ってから書斎の机に向かった。週に一回、大学へ講義にいくが、午後の大半は原宿の事務所のほうへ行く。建築家でありながら、最近ではむしろ美術のほうにのめりこんでいる。いま机の上にある案内状にも、マチスの展覧会が近くの近代美術館で開かれ、初期のフォーヴィズムから晩年にいたる六十余年の各時期の代表作・百六十点が一堂に集められている、と書かれている。

この展覧会に寄せて、ある雑誌からエッセイを求められている。

「なぜか、マチスは日本で不遇である……」その一行を書いて、伊織は考えた。

マチスはピカソと並ぶ二十世紀最大の巨匠といわれながら、ピカソよりはもちろん、ゴッホやユトリロ、さらにはムンクなどより数段人気は落ちる。その理由は、マチスの絵が初期の一時期を除いて、明るくカラフルで豊穡であるせいである。

日本人は明るさより陰鬱さを、豊穡より貧しさを好む。鮮やかな色彩の乱舞や、単純化した平面構成に馴染めず、むしろ絵のなかに文学を見る、あるいは精神性を求めるといったほうが適切かもしれない。ミレーの「晩鐘」のなかに誠実さを、ユトリロの「白」のなかに都会の憂愁を、ムンクの「叫び」のなかに生の不安をみて感動する。これにくらべてマチスはあまりに絵画的である。文学や精神や人生などには一顧だも与えず、ひたすら色として主張し、存在する。結局、日本人は絵を絵として見ず、そこに作家の生い立ちと生涯を重ねて見る癖がある。ゴッホの絵にゴッホの耳を切った狂気を、ユトリロの絵にユトリロの私生児としての生い立ちと孤独をダブらせ、共感する。

がいて、日本人は「貧窮」「苦悩」「孤独」「狂気」「夭折」「自殺」といった言葉を好む。現実にはそれを嫌っているが、他人がそれらにまみえるのを見ることには、おおいに関心がある。

だがマチスはこのどれにも当てはまらない。マチスの生涯は、豪華で奢侈で、かつ華麗であり、光りと豊かさのなかで大往生した感が深い。マチスの評価が日本で不当に低いのは、この豪華、豊穡のイメージにある。

伊織はそこまで書いてきて、手を休めた。

「豪華、豊穡」という言葉から、自然に霞のことが思い出された。外見は、茶室の横に咲く佗助のように静かで控え目なのに、去ったあとには豪華で豊穡な余韻がある。

いつときの思いから覚めて、伊織は再び机に向かった。

絵は絵として素直に見たい、その裏に、作家のどのような生い立ちや貧しさ、苦悩があるうとも、それらは絵と無関係である。絵は絵として独立するものであり、それ以外のなものでもない。一枚の絵がきれいで美しく、感動的であつたらそれでいい。少なくとも、マチスの絵はそう見たい。

ある評論家は、マチスの「ダンス」という絵について、手をつないだ輪が一カ所だけ切れていることにこだわり、その理由を延々と論じている。だが、はたしてそんなことに意味があるだろうか。手の輪が数センチ離れていようといまいと、その絵から躍動する人間の美しさや、楽しいリズムを感じとることができたら、それで充分である。評論家が、せっかく素直に見ようとする観客の目をいじけさせてしまう。

そこまで書いてきて、伊織は一人で苦笑する。

そういえば、自分も美術に関して評論家である。他人のことを批判して、その実、自分も案外つまらないことをいっているのかもしれない。